東京外国語大学語学研究所『語学研究所論集』第 24 号（2019), pp.37- 62.
Tokyo University of Foreign Studies, *Journal of the Institute of Language Research* No.24 (2019),pp.37-62.

〈論文〉

モンゴル語の再帰接辞の機能について
On the function of the reflexive suffix in Mongolian

風間 伸次郎
Shinjiro Kazama

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

要旨：　先行研究によれば、モンゴル語の再帰接辞は、主格以外の格であらわされる名詞が文の主語の一部であったり、持ちものであったり、血縁関係があったりする場合に接続するものとされている。あくまでも文の主語と（対象となる名詞項と）の間の関係であり、文の話し手とのつながりではないという。

しかし本稿では、主に話者からの聞き出し調査により、先行研究では記述されていない諸特徴が見出されたことを示す。すなわち、下記のような点を指摘する：

①再帰接辞は名詞以外のかなりさまざまな「品詞」[1]の語につく。
②再帰接辞にはダイクティックで、冠詞的な機能がある。
③主語だけでなく、話し手による支配によっても再帰接辞の現れることがある。
④主語への所属関係や主語からの支配がない名詞であっても、再帰接辞をとることがある。
⑤主語自体にも再帰がつくことがある。
⑥統語的な原則で説明できない再帰接辞は、基本的に話し手による支配によってダイクティックな語につくが、その際に再帰接辞が付くかどうかは情報構造（当該の語の定性）によって決まる。

Abstract: The previous research points out that Mongolian reflexive suffix is controlled by the subject of the very sentence. The reflexive suffix is considered that it appears on the noun which belongs to the subject or controlled by the subject. Although the present paper points out the followings;

[1] The reflexive suffix can be attached to the elements which are not only of nouns but also of many kinds of word classes.
[2] The reflexive suffix has deictic function and may show some functions like an article.
[3] The reflexive suffix may occur not only under the control of the subject of the sentence, but under the control of the speaker.
[4] The nouns which do not belong to the subject nor are under the control of the subject may take the reflexive suffix.
[5] The reflexive suffix may occur even on the subject itself.
[6] The reflexive suffix which is not explained by the syntactic principle may occur on the word of dectic character, and the criteria controlling the occurrence of the reflexive suffix depends on the definitness of the target word.

キーワード：再帰接辞、モンゴル語、主語、品詞、統語論
Keywords: Reflexive suffix, Mongolian, Subject, Word class, Syntax

本稿の著作権は著者が保持し，クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス（CC-BY）下に提供します．
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

[1] ここでのカギかっこ付きの「品詞」の意図する点に関しては、4.3. 節で詳しく述べる。

1. 本稿の目的

本稿ではモンゴル語[2]の再帰接辞について、それが出現する語用論的・語彙的・統語論的な諸条件を明らかにすることを目的とする。

2. 従来の記述における「再帰接辞[3]」の形式と機能の概要

2.1. 形態

ハルハ・モンゴル語において、再帰接辞は母音調和に従い、-aa~-ee~-oo~-öö の形で現れる。長母音や二重母音に終わる語では前に g が挿入される。’ に終わる名詞ではこれを i に変えてから -a~-e~-o~-ö のついた形となる。以下では上記の全部の異形態の代表形を-AA で示す。内モンゴルでは -ban~-ben~-iyan~-iyen と表記され、接辞の最後の部分は[ŋ]が発音される。

2.2. 再帰接辞の出現条件の概要

再帰接辞は、「<u>主格以外の</u>格であらわされる<u>名詞が</u>」「文の主語の<u>一部</u>であったり、<u>持ちもの</u>であったり、<u>血縁関係</u>があったりする場合に」接続する（山越 (2012: 73)、下線・太字は筆者による、基本的に以下も同じ）。他方、「あくまでも<u>文の主語との間の関係</u>であり、<u>文の話し手とのつながりではない</u>ことに注意してください。」としているものもある。以下では再帰接辞をひき起こすもの（上記の説明によれば「主語」）を「**トリガー**」と呼び、再帰接辞がつく要素を「**ターゲット**」と呼ぶ。

2.3. 再帰接辞のつくターゲットの統語的資格や品詞など

詳しく先行研究を見ると、ターゲットは主語と直接関連しなおかつ文末述語に直接支配された名詞だけではなく、その名詞の属格修飾語、種々の副詞項、副動詞、さらには副動詞相当句に及ぶ。文中の名詞項が修飾語を伴って複合語のようになっている場合、その前項も後項もターゲットになることがある。

Önörbajan et al. (2008: 141) では、再帰接辞が格の後ろにつくことと、名詞が並列された場合には最後の名詞のみにつくことを指摘している。Luvsanvandan (1968: 57-58) の記述は再帰接辞自体の形態論に偏っており、やはり主格以外の格の後ろにつくことに言及しているのみである。

Janhunen (2012: 140) の再帰接辞に関する記述においては、まず再帰接辞は名詞もしくは名詞化された語につくとし、さらに deer「上」のような明示的な語尾を持たない空間名詞につく例、および集合数詞につく例（tavuul-**aa** [(the).five.of.them-REF]）があるとしている。人称代名詞に限っては対格につく例もあるとしている（čamjg-**aa** [you.ACC-REF]）。属格の名詞はさらに -x を伴った上で再帰接辞をとるとし（下記の (1)参照）、他に再帰代名詞 öör も再帰接辞をとるが、欠格形の =güj には後続しない、としている。

---

[2] 本稿でいうモンゴル語とはモンゴル国のハルハ・モンゴル語と内モンゴルのモンゴル語諸方言を広く指すものとする。ただし例文の多くはモンゴル国のハルハ・モンゴル語の例を使用し、ハルハ・モンゴル語の状況を中心に記述する。その翻字は次のようなものとする： a = a, б = b, в = v, г = g, д = d, e = je, ё = jo, ж = ž, з = z, и = i, й = j, к = k, л = l, м = m, н = n, о = o, ө = ö, п = p, р = r, с = s, т = t, у = u, ү = ü, ф = f, х = x, ц = c, ч = č, ш = š, щ= šč, ъ = ”, ы = y, ь = ’, э = e, ю = ju, я = ja。なお先行研究における表記も基本的に本稿による方式に統一していることに注意されたい。内モンゴルのモンゴル語はチャハル方言によるものとし、清格尔泰 (1991) にしたがって文語表記からの翻字で示す（ただし清格尔泰 (1991) 自体の例文は氏の出身地であるハラチン方言の特徴を示していることもあることに注意が必要である）。なお本稿では、例の全ての語や形態素にグロスをつけることはせず、[ ] 内に再帰接辞自体及びそのホスト（内部の構成を含む）のグロスを示す（語末／句末／文末に付すが、行末に入らない場合は次の行の当該の語の下に付す）。再帰接辞と n’（3 人称人称小辞）が対立する場合には n’ を含む例についてもその構成のグロスを示す。本稿で用いたグロスは DIM: dim(unitive) 「指小辞」を除き、全て Leipzig glossing rules に記載のあるもののみである。語中／句中／文中の再帰接辞と n’ は太字で示す。例における再帰接辞等を含む語以外についての意味等の情報は、タブによって上下をそろえた日本語訳によってこれを示した。

[3] 再帰を示す形式については、先行研究によって再帰「語尾」と呼んでいるものもあるが、引用文中を除き再帰「接辞」に名称を統一した。

Janhunen (2012: 185) の句の統語論的構造の章には、特に再帰接辞に関連する記述は見当たらない。

再帰接辞が現れる統語的な位置について、Kullmann and Tserenpil (1996: 108) は、次の 3 種があるとしている（[ ] は筆者が加えたものである、以下も同じ）。

(1) Bi najz-yn-x-**aa** zaxiag avav. [friend-GEN-NMLZ-REF]
「私は 自分の友人の 手紙を 受け取った。」 ［① N-N 構造の修飾要素］

(2) Xüüxdüüd aav-aas-**aa** asuuv. [father-ABL-REF]
「子供たちは 自分の父親に 訊いた。」 ［② N-V 構造における名詞項］

(3) Bi gertee ir-megc-**ee** caj uuv. [enter-CVB-REF]
「私は 自分の家に （自分が戻って）来るとすぐに お茶を 飲んだ。」
［③ V-V 構造における副動詞節］

岡田・向井 (2006) は次のように述べる（例文番号は筆者による）：

全体でひとつの意味を表す複合語の場合は、複合語[4]全体のあとに再帰語尾が付く場合もあります。

(4) ojuutn-y-x-**aa** bajrand ＝ ojuutn-y bajran-d-**aa** 「自分の学生寮」
[student-GEN-NMLZ-REF] [building-DAT-REF]

主語に関係あれば再帰語尾を繰り返し使うことも可能です。

(5) Či ger-ees-**ee** mašin-**aa** gargav uu?
「君は 自分の家から 自分の車を 出しました か？」
[house-ABL-REF] [car-REF]

再帰語尾は代名詞[5]にも接続することができます。

(6) Bi čamajg-**aa** ügüjlž bajna. [you.ACC-REF]
「私は （自分の）君を 恋しく思って います。」

山越 (2012: 137) では、副動詞形成接辞（山越 (2012) の用語では連用形）を 2 つに分け、等位節を形成し全体が重文となるものと副詞節を形成し全体が複文となるものに分け、主語が同一の場合、副詞節形成接辞に再帰接辞が続き得る、としている。

等位節を形成するもの：-ž, -AAd, -n, -sAAr, -mAAr, -vč, -ngAA

副詞節を形成するもの：-xlAAr, -mAgč, -ngUUt, -tAl

(7) Japond baj-x-d-**aa** ödör bür cagaan budaa iddeg bajsan.
[be-PTCP.FUT-DAT-REF]
「日本に （自分が）いるときは 毎日 お米を 食べて いました。」

[4] (4) のような例を「複合語」とみるかどうかは、複合語をいかに定義するかによって異なってくるものと考えられる。ここではひとまず (4) のような例において前項と後項のいずれにも再帰接辞がつき得るという言語事実に注目したい。

[5] 山越 (2012: 72) でも 2 人称代名詞に再帰接辞のついた例を示しているが、そこでは「相手との関係がとくに親密な場合に用い」るとしている。

岡田・向井 (2006) は形動詞がさまざまな語尾や後置詞をとることで連用節を作る形式を、次のような A と B の 2 つのグループに分け、A のグループに属する諸形式では前半の【形動詞形語尾＋格語尾】の部分の最後に再帰接辞がつき、B に属する形式では形式全体の末尾につく、としている。

A : -xaas ömnö「【V】する前に」、-xyn ömnö「【V】する直前に」、-sany daraa「【V】したあとで」、-sanaas xojš「【V】したあとで」

B : -x üjed「【V】するときに／【V】したときに」、-x xültel「【V】するまで」、-x boltol「【V】するまで」、-x tutam「【V】するたびに」、-x bürd「【V】するたびに」、-x bolgond「【V】するたびに」、-x xoorond「【V】するあいだに」、-xtaj zereg「【V】すると同時に」、-x zavsar / -x zavsraar「【V】する傍らで」、【V】するあいだに」、-x zuur「【V】する傍らで／【V】するあいだに」

塩谷・中島 (2011: 112) では「一定の語（特に時や場所・方位を表す語）に付加され、副詞として用いられる」とし、同じく塩谷・中島 (2011: 117) に「副詞形成」の例として、ijš-**ee**「こちらへ」、naaš-**aa**「手前へ」、gadagš-**aa**「外へ」、deeš-**ee**「上へ」、züünš-**ee**「東・左へ」、ömnöš-**öö**「南・前へ」の 6 語を示している。

2.4. 全体量と部分量

Kullmann and Tserenpil (1996: 244) によれば、次の例において「もし数詞が再帰接辞なしで用いられれば、その主たる関心は数に向けられ、再帰接辞がつけば、その主たる焦点は彼らの全員が来たかどうかという事実に置かれる」とある。

(8) Ted nar　zurguul　irsen.
「彼らは　六人で　来た。」

(9) Ted nar　zurguul-**aa**　irsen. [in_six_persons-REF]
「彼らは　（自分たち）六人で　来た。」

ただし部分量でも、全体が文中に明示されていない場合には再帰接辞が現れるようだ。清格尔泰 (1991: 190) は「[与格＋再帰] は範囲を示す」と記述している。なお与格接辞と再帰接辞が連続する際には内モンゴルでは -dU-bAn / -dAGAn (-daɢan / -degen) のような形式となる。

(10) sain-**daɢan**　oron_a [good-DAT.REF]　「よい方に属する」

(11) qurdun-**daɢan** baɢtan_a [fast-DAT.REF]　「速い方に含まれる」

(12) baɢ_a-**daɢan** oroqu　ügei [small-DAT.REF]　「小さい方に属さない」

2.5. 例外的なトリガーとターゲットとの関係

岡田・向井 (2006) は主語に帰属しない例外的な再帰接辞の出現について、次のように述べている：

> 次の文では、再帰語尾をとった名詞は主語[6]が所有するものでも主語に所属するものでもありませんが、「主語が管理して処理することができるもの」という意味で再帰語尾が使われている例です。

(13) Odoo　conx-**oo**　xaax　uu? [window-REF]
「もう　（自分が管理・処理できる）窓を　閉めます　か？」

フフバートル (1993: 114) は「動作主がいつもすること、あるいは習慣的にすること」を言い表す場

[6] 先行研究の指摘の中の記述であるので、筆者が述べるべきことではないかもしれないが、説明を加えるならば、この文の主語は窓の所有者ではなく、話し手であるということに基づいて記述している。

合にも主語に帰属しない例外的な再帰接辞が用いられることを指摘している。

2.6. 一般論における再帰接辞の接続不可について

Kullmann and Tserenpil (1996: 263) は、次の例文において、「一般論であるので öör-ijn-x-**öö** は使えない」[self-GEN-NMLZ-REF]としている。

(14) Öörijn jum örgüj.
「自分の 物は 負債ではない。(諺)」(Kullmann and Tserenpil ([2006]: 263))

2.7. 主節主語による従属節中の名詞における再帰接辞の支配

水野 (1991) では、下記のような例文において、話者によってその判断が異なることを指摘している。

(15) Bi Doržijg exner-tej-g-**ee** jarilcaž bajsan törx bajdlijg sanaž bajna.
[wife-COM-E-REF]
「私は ドルジが 自分の妻と 話して いた 様子を 思い出して いる。」
(水野 (1991: 205)、なお翻字方法は本稿のものに改めた)

すなわち、主節主語の bi「私」もしくは従属節の主語の Dorž「ドルジ」の両方ともトリガーとみなし、exnertejg-ee「自分の妻」の自分は「私」とも「ドルジ」とも解釈できるとする話者がいることを指摘している。他方、従属節の主語である Dorž「ドルジ」の方しかトリガーになれないとする話者もいるとしている。水野 (1991) では、上記のような「外の関係」による連体修飾複文ばかりでなく、[形動詞＋与格] や、副動詞による複文でも同様の調査を行い、やはり主節従属節両方の主語をトリガーとして認める話者と従属節主語のみをトリガーとする話者が常に一貫した判断を示すことを指摘している。

2.8. 先行研究のまとめと問題点

まず統語的な観点について確認すると、主語をトリガーとし話し手はトリガーにならないと述べている先行研究もある (2.2.)。もしそうであれば再帰接辞の出現は全く統語的な条件のみによって決まっていると考えられる。しかし本稿で明らかにしていくように、再帰接辞の出現には情報構造が大きく関わっている。一方で再帰接辞のトリガーについて、主節の主語だけでなく、従属節の主語もトリガーになり得ることが指摘されている。一方再帰接辞のターゲットは (主語と直接の関連が考えられる) 文末述語に直接支配された名詞だけではなく、その名詞の属格修飾語 (-x を伴った上で再帰がつく)、複合語前項、種々の副詞項、副動詞 (相当句)、などに及ぶことが指摘されている (2.3., 2.7.)。しかしそれ以外の統語的資格の要素がトリガーやターゲットになり得るとは指摘されていない。

次に語彙的な観点に関しては、一般名詞もしくは名詞化された語以外にも、空間名詞、集合数詞、人称代名詞、再帰代名詞、後置詞の一部、副詞の一部、副動詞の一部に再帰接辞がつき得ることが指摘されている (2.3.)。しかしこれ以外にも再帰接辞をとる「品詞」もあり、さらになぜその「品詞」に属する語が再帰接辞をとり得るのか、具体的にどのような文でどのような機能を示すために再帰接辞をとるのか、といった点までは十分に考察されていない。副詞に関してはどのようなものに再帰接辞がつき、どのようなものにつかないか、という点についての調査がなされていない。一般名詞に関しては、例えば所有傾斜の階層で占める位置の違いによってその必須性に違いがあるか、というような観点からの調査がなされていない。

最後に情報構造の観点に関しては、主語が管理して処理することができるものや、動作主が習慣的に行う行為の動作対象にも再帰接辞のつくことが指摘されているが (2.5.)、その背景や、より根本的な使用の理由については分析されていない。一つの具体例に限って、一般論では再帰接辞の使用が不可であ

ることが述べられているのみである（2.6.）。

再帰接辞のみを研究対象として特化した論文や、上記の 3 つの観点を分け、さらにそれらの観点からの調査結果を総合して再帰接辞の出現条件を考察し、再帰接辞の本質の解明を目指した論考は管見の限り見当たらない。

3. 研究方法

モンゴル国出身の 2 名の話者（1987 年 Ulaanbaatar 生まれと 1989 年 Övürxangaj 生まれ）と内モンゴル出身の 1 名の話者（1985 年 Bayannuur 生まれ）の協力を得て、Kullmann and Tserenpil (1996) および清格尔泰 (1991) における再帰接辞を含む諸例を逐一検討し、再帰接辞の出現条件を研究した。判断において、モンゴル国出身の 2 名の話者の間に不一致が生ずることはなかった。なお以下で「作例」とあるものはコンサルタントに作例していただいたものである。

4. 分析

4.1. 情報構造による再帰接辞の出現／非出現

4.1.1. 一般論における不定の対象における再帰接辞の非出現

一般論や慣用句／固定表現など、個別の具体的な指示対象が明確でない場合には、再帰接辞は基本的に現れない。

下記の内モンゴルの 2 つの文例における sanaɢ_a amur bol-「安心する（lit. 心が 安らかに なる）」と、čilüge talbi-は「休みになる（lit. 自由を 置く）」の 2 つの述語表現は固定表現であり、このような固定表現の場合、「安心する」、「休みになる」といった個々のできごとが現実の場面で個別の行為者によって具体的に行われても、再帰接辞はつかないという。

(16) čimayi üǰeged tere sayi sanaɢ_a amur bolǰai.
「おまえを 見て、 彼は やっと 安心した。」

(17) čilüge talbibal ger-tegen qarin_a gen_e.
「休みになったら 自分の家に 帰る そうだ。」

査読の方から、山越 (2001: 200) に teriig üzeed bi <u>tsarai-g-**aa** aldčixǰee</u>.「それを 見て 私は 青くなった」（下線部は [face-E-REF lose]）という例があるという御指摘をいただいた。したがって慣用句にも再帰接辞を伴う例のあることがわかる。ただこの例の慣用句の場合、山越 (2001: 200) の指摘するように慣用句を構成する 2 語の間の結合度は低く、生じた事態そのものはアクチュアルな個別の事態であることが確認できる。このように慣用句とみなせるものであってもその慣用句の構成要素間における結合度の強さの度合いや、その慣用句の文脈における具体的な実現の仕方によって再帰接辞の接続の可否は異なる。今後さらに多くの表現とその実例について上記の観察ならびに仮説を検証していく必要がある。

次の文で再帰接辞をはずすと、不自然であるという。

(18) a. Xüǰtnij ulirald gaduur <u>jav-a-x-d-**aa**</u> dulaan xuvcas ömsöx xeregtej.
[go-E-FUT.PTCP-DAT-REF]
「寒い 季節に 外へ （自分が）出る時は 温かい 服を 着る 必要がある。」（作例）

これに対し、再帰接辞をはずした javaxad を用いた文では、主節に xecüü 「困難な、難儀な」のような形容詞がくると落ち着く感じがするという。

(18) b. Xüǰtnij ulirald gaduur <u>javaxad</u> xecüü.
「寒い 季節に 外へ 出るのは 辛い。」（作例）

ここで (18)a. の述語は gaduur javax「外へ出る」という個別の動作であり、他方 (18)b. の述語は xecüü「辛い」という（一定の時間持続する状態を示す）形容詞である。内モンゴル出身の話者によれば、再帰接辞があるとよりアクチュアルな個別の事態、再帰接辞がないと一般論のような感じがするという。

4.1.2. 恒常的使用などによる「定」の対象における再帰接辞の出現

現実の個別の事態における具体的な人物／事物が、主語に所属するものと考えられる場合、再帰は必須である。次の例における再帰接辞は必須であるという。

(19) Bi očigdör najz-taj-g-**aa** xamt delgüürt očson. [friend-COM-E-REF]
「私は 昨日 自分の友人と 一緒に 店に 行った。」
Tegeed bid xojor büx šaardlagataj züjl-**ee** xudaldaž avsan. [article-REF]
それから 私たち 二人は 全部 必要な 物を 買った。」（作例）

しかし、現実世界の個別の行為でも、主語との関係がそれほど明確でない場合には再帰接辞は任意になる。nomyn san「図書館」は学校に帰属するものと考えられるため、次の例には再帰接辞がない。ただし、もしこの nomyn san「図書館」にしょっちゅう通っている場合であれば、再帰接辞が使えるという。このことはこの名詞が話者にとって恒常的な対象として意識されているということを示している。すなわち「定性」の高い名詞として認識されていることになるものと考える。

(20) Bi önöödör xičeelgüj.
「私は 今日 授業がない。

Tijm učraas { nom-yn san-d / nom-yn san-d-**aa** } očiž nom unšiv. [book-GEN storehouse-DAT-REF]
それで {図書館へ / 自分の図書館へ} 行って 本を 読んだ。」
（Kullmann and Tserenpil (1996: 323) に基づく）

次の例でもいつも乗っているバスであれば問題なく再帰接辞をつけることができるという。これも上記と同様に「定性」の高さからの説明が可能である。

(21) Ter { avtobus / avtobus-**aa** } xüleež bajna. [bus-REF]
「彼は {バスを / 自分のバスを} 待って いる。」（作例）

次の例で、どこに行くか何を食べるかも決まっていない場合、ふつう再帰接辞はつかないという。

(22) Xool idxeer jav''ja.
「御飯を 食べに 行こう。」（作例）

しかし、毎週決まったメンバーで同じ店に行くような場合ならつき得るという。

(23) Xool-**oo** idxeer jav''ja. [meal-REF]
「（いつものお店にいつもの）御飯を 食べに 行こう。」（作例）

4.1.3. 主語に所属さない「定」の語における再帰接辞の出現

岡田・向井 (2006) は主語に所属するものでなくとも、主語が管理して処理することができるものには再帰接辞がつく、としていた（2.5 節参照）。ところが次の例における kino「映画」は（イベント時においても発話時においても）主語に所属するものではなく、しかも過去の疑問文なので主語のコントロ

ールが全く及ばない対象であるにも関わらず、再帰接辞がついている。

(24) Ta nögöö kino-g-**oo** duustal üzsen üü? [movie-ACC-REF]
「あなたは、 あの 映画を 最後まで 見ましたか？」
（Kullmann and Tserenpil (1996: 266)）

母語話者によれば、kino-g-oo における再帰接辞は「例のあの」の意味を示しているという[7]。nögöö「例のあの」が修飾している名詞であれば、かなり義務的に再帰接辞が現れる[8]という。

さらに次の例(25)のように「定」であれば、nögöö「（例の）あの」がなくとも再帰接辞がつく。この場合、ene modny「この 木の」にしても意味は変わらない。1 人称が主語でも言えるという。

(25) Naad modn-y-x-**oo** nerijg medex üü? [tree-GEN-NMLZ-REF]
「こっち側にある 木の 名前を 知っている？（話し手と聞き手がその木に今、関心を持って見たりしている状況で）」（作例）

(26) Bi ter modn-y-x-**oo** nerijg medne. [tree-GEN-NMLZ-REF]
「私は その 木の 名前を 知っているよ。」（作例）

しかし 3 人称主語では、再帰接辞の使用は不可と判断され、2 人称の小辞（čin’）を用いる必要があるという。ここで 3 人称の n’ を用いるのは不自然となる。話者によれば naad を何らかの人称で受ける必要があるが、3 人称主語では再帰接辞が使えないので、このどちらかになるのだという。ここで naad は発話の場面に今存在する木を指し、2 人称の小辞（čin’）を用いると、さらにその木は発話者と聞き手に関係のあるものと認識されるという。

(27)a. Ter naad {*modn-y-x-**oo** nerijg / modn-y **čin’** nerijg / modn-y nerijg **cin’** } medne.
「彼は その 木の 名前を / 木の 名前を / 木の 名前を 知っているよ」（作例）

(27)b. Ter caad {*modn-y-x-**oo** nerijg / modn-y **čin’** nerijg / modn-y nerijg **cin’** } medne.
「彼は あちら側の 木の 名前を / 木の 名前を / 木の 名前を 知っているよ」（作例）

他方、nögöö「例のあの」を用いれば 3 人称主語でも再帰接辞が現れる。この場合、その木は ter「彼」に関係のある木と解釈されるという。

(28) Ter nögöö modn-y-x-**oo** nerijg medne. [tree-GEN-NMLZ-REF]
「彼は その 木の 名前を 知っているよ」（作例）

上記のように naad は発話の場面に今存在することを含意するダイクティックな語であるので、3 人称の主語は現れにくい、ということが考えられる（この点は査読者より御教示をいただいた）。そこで

---

[7] なお nögöö がついていても再帰を外すことはでき、意味も同じであるという（Ta nögöö kinog duustal üzsen üü?）。nögöö もはずしてしまうには、代わりに ene「この」などの修飾語が必要であるという（Ta ene kinog duustal üzsen üü?）。
次の文のように、nögöö 自体に再帰接辞のついた例もある：Ta nögöötx-**öö** duustal üzsen üü?「あなたは例のあれを最後まで見ましたか。」（Kullmann and Tserenpil (1996: 266)） ここで nögöögöö とは言えないという。ここでの-tx は、再帰接辞によって目的語とするための一種のベースとして機能し、そのために出現しなければならない要素であると考えられる。

[8] 実際に上記の註 7 でみたように nögöö の後ろの名詞に再帰の現れない例はある程度以上存在するようだ。その出現／非出現の条件の解明は今後の課題である。他方、 nögöö が単独で、もしくは tal「側」を伴って「もう一方」という意味になる時は必ず 3 人称人称小辞の n’ を伴うという（山田 p.c.）。

naad を ter「あの」に置き換えて調査したところ、再帰接辞は使用可能であると判断された。

(29) Bat ter {modn-y-x-**oo** nerijg / modn-y **čin'** nerijg / modn-y nerijg **cin'** } medne.
「バトは あの 木の 名前を / 木の 名前を / 木の 名前を 知っているよ」（作例）

再帰接辞を用いた場合、発話のこの場面に今その木はなく、話し手も聞き手もバトも特定することのできる「例のあの」木を指すという。一方 2 人称の小辞（čin'）を用いると、その木は聞き手と関係がある木と解釈されるという。なお 2 人称の小辞は修飾語「木の」の後ろに現れても、被修飾語の「名前の」の後ろに現れても、どちらでもかまわないという。

再帰接辞も 2 人称の小辞も用いなければ、今その木は発話の場面にあると解釈されるという。

(30) Bat ter modn-y nerijg medne.
「バトは あの 木の 名前を 知っているよ」（作例）

次の文の主語は「雨」であるとも考えられるが（コンサルタントによれば、実際に Zun-d-**aa** ix boroo orov. 「夏に 大雨が 降った。」と言うこともできるという、ただし「空」や「天気」が主語である可能性も考えられる）、その主語に支配されていない再帰が現れている。

(31) Zun-d-**aa** ix boroošiv. [summer-DAT-REF]
「夏に たくさん 雨が降った。」（Kullmann and Tserenpil (1996: 363)）

この再帰接辞のトリガーは、話者というよりもその雨が降る地域の住民であるように感じられるという。しかし、話者がその地域における事実を体験していれば、現在別の場所にいても発話できるという。体験していない場合、本などでよく知っている場合には、Zundaa ix borošdog genee. （genee は先行する説が伝聞であることを示す）のように伝聞の文にすれば言えるという。

なお Zun ix boroošiv. と再帰なしで言うこともできるという。再帰がついていた方が、冬などとの対比のニュアンスが感じられるという。

4.2. 述語による違い

上記の(19)の例における av-「得る、買う」は、行為の後に対象が新たに獲得されるような動詞、すなわち「達成目的語」（effiziertes Object, フィルモア (1975: 54-55)）をとる動詞である。再帰接辞の出現／非出現には動詞の意味や変化形も関わっている可能性が考えられる。

まず、以下では「達成目的語」をとる xij-「作る」、av-「買う、得る」について検討する。

次の例のうち、(32)b. の xajrcag「箱」に再帰接辞が付いた文においては、その箱は子供たちが自由に作るものではなく、先に先生が指示した形や大きさなどの箱であり、先に何らかの文脈に会った「箱」と解釈される。すなわち「定」でなければならない。この点でこのような達成目的語をとる動詞は、主語に所属するものに再帰接辞を要求する他の一般的な動詞とはそのふるまいが異なるということがわかる。

(32) a. Odoo xüüxduud xajrcag xijne. / b. Ödoo xüüxduud xajrcag-**aa** xijne. [box-REF]
「今 子供たちは 箱を 作る。」（作例）

次の av-「買う、得る」に関する例文(33)でも同様で、b. のように再帰接辞がつくと買おうと思っているのは「定」の自転車となるという。

(33) a. Ter šine duguj xudaldaž avmaar bajgaa yum šig bajna. /

(33) b. Ter (nögöö) šine duguj-g-**aa** xudaldaž avmaar bajgaa yum šig bajna. [bicycle-ACC-REF]
「彼は （例の） 新しい 自転車を 買いたい らしい。」（作例）

4.3. 再帰接辞のつく品詞の範囲 — モンゴル語の「品詞」分類についての問題点を踏まえて

管見の限り、先行研究が具体例によって再帰接辞がつくことを明示的に説明していた要素以外に、次のような諸要素に再帰接辞がつくことが観察できる。すなわち、指示詞（4.3.1.）、疑問詞（4.3.2.）、副詞（4.3.3.）、後置詞（4.3.4.）、につく例が見出される。

ここで「品詞」としてとりあげた 4 つの語類について、若干の説明を加えることにする。

まず指示詞や疑問詞は「語類にまたがって分布する機能類」であり、別個の品詞としてみなすには問題がある（この点は査読者より御教示をいただいた）。他方で、指示詞や疑問詞は具体的な一般名詞とはかなり性質を異にする対象を指示する語類であるので、「主語の一部であったり、持ちものであったり、血縁関係があったりする」ことがやや想像しづらい。筆者が専門としてきたツングース諸語にもきわめてよく似た機能を示す再帰接辞があるが、これは指示詞や疑問詞につくことがない（少なくとも筆者は見たことがない）。このような観点からみると、これらの一群の語に再帰接辞がつくのか、つく場合にはどのような条件があるのか、という点を明らかにすることはきわめて重要なことであると考える。さらに、指示詞および疑問詞の品詞として認定は上記のような問題をはらんでいるが、例えばモンゴル語の「疑問詞」は文末に一定の助詞を要求するという統語的な特性を示す点で、少なくとも一群の語類として定義することも可能であると考える（もちろんこの点に関しては、稿を改めて論ずる必要がある大きな問題であろう）。

次に副詞と後置詞についてであるが、モンゴル語においてこれらの品詞の定義が難しいことはこれまでにもいくつもの研究によって指摘されている（例えば山越 (2012: 175-176)）。副詞に関しては、同時に形容詞や名詞としての用法をもつものも数多く存在している（山越 (2012: 174)）。モンゴル語に限らず一般に義務的な語形変化を持たない語の（特に形態論的な基準からの）品詞の決定に困難が伴うことは当然のことと言えるだろう。山越 (2012: 40) ではモンゴル語の品詞を、まず名詞類（名詞、代名詞、形容詞、数詞）と動詞、不変化詞類（小詞、間投詞、接続詞、副詞）に分けている。山越 (2012: 40) は「上記の分類が妥当かどうかについても検討する必要があ」るとした上で、「この分類がもっとも全体像をつかみやすいものといえる」としている。本稿でひとまずこれに従って調査を進める。具体的には、副詞については Kullmann and Tserenpil (1996: 221-233) にあがっている語群をその調査対象とし、後置詞については山越 (2012: 179-184) にあがっている語群を同じく調査対象とする。これら副詞や後置詞は、語によって一部の格や再帰接辞をとることがあり、上述のように名詞との境界が問題になって来る。その内部は名詞性の度合いによって段階的に分類される可能性がある。ゆえにこれらの品詞の問題を解決するには、丁寧に問題の語群における格や再帰接辞の現れを調査・分析し、それによって再分類および階層的な位置づけを行う必要があるものと考える。風間 (2019) は「後置詞」に関するそのような試みの一つであり、本稿も同じく「副詞」と「後置詞」の性格について、再帰接辞の付加の可否という観点から分析したものといえる。

4.3.1. 指示詞

指示詞についた場合、そのトリガーは主語でなく、ターゲットが「定」であることを示す。

すなわち、次の文では指示詞 end「ここで／ここに」に再帰接辞がついているが、別にその場所は話し手の家や仕事場などでなくてもよく、話し手が少し前からいた場所であればどこでもよいという。なお内モンゴルでは、再帰接辞がない場合、例えば聞き手と電話で話しながら歩いていて、「では、ここで待ちます。」と新たにそこで待つ場所を指定したような感じがするという。

(34) Čamajg irex (cag) xürtel bi end-**ee** bajja. [here-REF]
「あなたが 来る まで 私は ここで 待ちましょう。」
（Kullmann and Tserenpil (1996: 295)）

3 人称の人物が主語でも指示詞に再帰接辞のついた表現は可能であるという。その指示詞が指示する場所は主語にとっての場所ではなく、話し手にとっての end「ここで／ここに」である。

(35) Ter end-**ee** irne gene. [here-REF]
「彼は（今話している） ここに 来る そうだ。」（作例）

聞き手が十分に情報を共有していないものでも、恒常的に主語／話し手の意識において（関心の）対象になっているものであれば、再帰接辞がつく。

(36) Bi üün-ijg-**ee** avsan. [this-ACC-REF]
「私は 自分のこれを 取った／買った」
（本来自分のものであったものを取り戻した場合や、長いことずっと買いたいと思っていたものを、やっとお金がたまってやっとのことで手にした場合など）（Kullmann and Tserenpil (1996: 111)、再掲）

やはりこのような表現は 3 人称の人物が主語でも言えるという。

(37) Ter tern-ijg-**ee** avsan gene. [that-ACC-REF]
「彼は その（今問題にしている）ものを 買った そうだ。」（作例）

ただし、その場所に対し何の行為も行わず、単に状態／状況を述べる場合には再帰接辞はつかないという。

(38) Manaj ger { end-ees / *end-ees-**ee** } ix xol biš. [here-ABL-REF]
「私の 家は ここから それほど 遠く はない。」
（Kullmann and Tserenpil (1996: 329)に基づく）

4. 3. 2. 疑問詞

疑問詞のうち、xen「誰」、juu「何」、xaana「どこ」、xedijd「何時に」には再帰接辞がつくが、xezee「いつ」にはつかないという。一般に通常の疑問文では疑問詞に再帰接辞はつかず、再帰接辞がついた場合には、下記の諸例のようにその行為に対する何らかの特別なニュアンスを加えた表現（修辞疑問文とみてもよいだろう）になるという。

次の例には、「連れて来た人が気に入らない」、もしくは、「一人で来ればよかったのに」、などのような話し手の不満の気持ちが含まれているという。したがって一種の修辞疑問文となっているとみることができるだろう。再帰接辞がなければ普通の疑問文になるという。

(39) Ter xen-ijg-**ee** daguulž irsen jum be? [who-ACC-REF]
「彼は（彼と関係のある例のあの） 誰を 連れて きた のか？」（作例）

次の文は典型的には親から子供に、勉強など本来やるべきことをやっていないことに対する非難の意味を込めて言うという。

(40) Či juu-g-**aa** xijž javaa jum be? [what-E-REF]
「おまえは（その） 何を やっている んだ!?」（作例）

通常の疑問詞疑問文であれば、疑問詞の対象は当然「不定」である。しかし上記の例文 (39) および (40) において、連れてきた人物やおまえが行っている行為はすでに聞き手に取って明確なものとなっている。すなわち「定」である。ここでも再帰接辞は疑問詞の指示対象が「定」であることを前提に生じるものと分析することができる。なお以上の分析については、査読者の示唆を得たものであることを記してここにお礼申し述べたい。

4.3.3. 副詞

副詞全体に関する再帰接辞の出現に関する分析結果は以下のようである。

表 1：種々の副詞における再帰接辞の出現の可否

			再帰接辞
《1》情態副詞	《1-1》様態の副詞		全く現れない
	《1-2》時間の副詞		発話時を基準とする一部の語で必須もしくは可
	《1-3》場所の副詞	方向	ﾀﾞｲｸﾃｨｯｸな語で任意、中和あり、話し手基準
		範囲	任意、主語基準
	《1-4》数量の副詞	主語の全体量	必須、話し手基準
		主語の部分量	任意、ただし話し手の判断による範囲は必須
		主語以外の全体量	不可か 3 人称小辞による、モノでは再帰も可 与格付きであれば可
		行為の回数	任意
		行為の時間的長さ	主語が完全に支配している時間であれば可
《2》陳述副詞			一部の語で可、ただし語彙化している

以下では各種の副詞ごとに実例をみながら分析を加えていくことにする。

《1》情態副詞

《1-1》（動作の）様態の副詞

様態副詞には再帰接辞はつかないようだ。これは様態を示す接辞の意味が絶対的であり、ダイクティックな側面を示さないためだと考えられる。例えば次の例 (41) における副詞 ajaar「静かに」であれば、誰がどのような場面で発話しようともその意味内容に大きな変動があるとは考えられない。裏を返せば他の副詞に再帰接辞がつくのはそれらが多かれ少なかれダイクティックな意味を示すためであると考えられる。なお後述するように与格がついた場合に再帰接辞がつきやすくなる傾向があるため、与格をつけた形についても適格性を判断していただいた。

(41) Emnelegt { ajaar / *ajaar-**aa** / * ajaar-d-**aa** } jarix xeregtej. [quiet-REF / quiet-DAT-REF]
「病院では 静かに 話してください。」（Kullmann and Tserenpil (1996: 221)）

(42) Ter ene üzgijg { xuga / *xug-**aa** } coxison. [with_a_snap-REF]
「彼/彼女は この ペンを 叩き折った。」（Kullmann and Tserenpil (1996: 221)）

《1-2》時間の副詞

調査結果は次のとおりである。「いつも」のような意味（下記では太字で示した）を示し、発話時点でその時点がいつであるかを具体的に確認できないものには再帰接辞がつかないが、「もうすぐ」のように

発話時点において、発話時点を基準にしてこそ明確になる時間を示すもの（下記では下線を付した）には再帰接辞がつきやすいということが観察できる。このような分布も再帰接辞のダイクティックな性格の現れとみることができよう。

再帰接辞のつかないもの：daraa「次」、ajaar「今度、そのうち、徐々に」、ur'd「以前に、前に」、saja, sajaxan「この前、さっき、たった今、最近」、üürd「**永遠に**」、önöd「**永遠に、ずっと**」、ašid「**永久に**」、egnegt「**いつも、ずっと、永遠に**」、nasad「**いつも**、一生の、長年の」、ürgelž「**いつも**」、jamagt「**いつも**」、dandaa「**いつも**」、xezeed[9]「**いつも**」、xojšid「これ以降」、üter「直ちに、早速、すぐに」、genet(xen)「いきなり、急に」、bajnga「**よく、いつも**」

再帰接辞のつくもの（( )内が使われると判断された形式である）：xožim「後で、後に、将来」（xožim-**oo**）、möd「もうすぐ、間もなく、近いうちに」（mödxönd-**öö**）、ert, ertxen「早く、早めに」（ertxend-**ee**）、oroj, orojxon「遅く、遅めに」（orojxond-**oo**）、tödxön「もうすぐ、近いうちに」（tödxönd-**öö**）、darujxan「今すぐ、今から」（darujdxand-**aa**）、tür「一時的に、とりあえず」（türd-**ee**, türxend-**ee**）、xaajaa「たまに」（xaajaad-**aa**, xaajaaxand-**aa**）、tuž「**いつも、ずっと**」（tužd-**aa**, ただし文語的であるという）

再帰接辞のつくものうちの 2 語目以降、すなわち mödxön-d-öö 以下の語の多くで、再帰接辞の前に与格の現れていることが目に付く。このことは註 6 や下記の「・主語の部分量を示す数量の副詞」で触れた／触れるように、より名詞的な形を整え、再帰接辞をとるための一種のベースとして働くために機能しているものと思われる。一方で、これらの語は与格や再帰接辞をとることを根拠に名詞（もしくはそれにより近い性格を示す語類）に分類することも可能だろう。

odooxond-**oo**「現時点で」、ojrd-**oo**「最近」、はもっぱら再帰接辞のついた形で現れるが、方言差があり、内モンゴルでは odooxond-**oo**「現時点で」は再帰接辞なしでも発話可能で、ojrd-**oo**「最近」には再帰接辞がつかないという。なおハルハ・モンゴル語では 3 人称が主語でも再帰接辞が現れる。

(43) Odoo-xon-d-**oo** jamar č soningüj. [present-DIM-DAT-REF[10]]
「現時点では、 何の ニュース（面白いこと）もありません。」
（Kullmann and Tserenpil (1996: 278)）

(44) Ter ojr-d-**oo** övčtej bajgaa. [near-DAT-REF]
「彼は 最近 病気 だ。」（Kullmann and Tserenpil (1996: 195)）

再帰接辞のついた ojr-d-**oo** は発話時点を基準とするため、次の (45)b. の例にみるように、従属節中には使えないという。すなわち、(45)a. での ojr-d-**oo**「最近」は主節の項として解釈できるため、発話時点を基準とした時を示すことができる。これに対し (45)b. では従属節中の主語と述語に挟まれた位置に生起しているため、ojr-d-**oo**「最近」は従属節の項としてしか解釈できなくなるため、使用できないのだと考えられる。

(45)a. Bi ojr-d-**oo** [tüünijg irxed] gertee bajxgüj bajsan. [near-DAT-REF]
「私は 最近 ［彼が 来た時に］ 家に いなかった。」（作例）

---

[9] ただし内モンゴルの話者は xezeed「いつも」、xojšid「これ以降」にも再帰接辞がつくと判断した。

[10] このように分析したが、小沢 (1983: 284) では odoo からの派生した語彙項目として odooxon「即刻、いましがた」があがっており、次の例 (44) の ojrdoo についても同じく小沢 (1983: 285) に ojrdoo「最近、この頃」があがっている。コンサルタントもあまりこれ以上分析できる語としては意識していないという。したがってこれらの語は名詞と副詞の中間的な位置を占める語と考えられる。今後はこのような格と再帰接辞の出現を観察し、その品詞的な位置づけを考えていくべき語であるといえよう。

(45)b. *Bi [tüünijg ojr-d-**oo** irxed] gertee bajxgüj bajsan. [near-DAT-REF]
「私は ［彼が 最近 来た時に］ 家に いなかった。」（作例）

dor-oo「すぐに（lit. 下-再帰）」も主語の人称によらず使えるという。興味深いことに、dor n’（ n’ は 3 人称の人称小辞、主語は単数）も同じ意味で使うことができ、しかも主語が何人称であっても使えるという。したがってこのような場合には「人称要素の対立の（機能的な）中和」が観察される。さらに dor dor-oo は主語が複数の場合には人称によらず使えるという（内モンゴルではさらに単数主語にも使えるという）。

(46) Ter xulgajč { dor-**oo** / dor **n’**} ünenee xelsen. [immediately-REF (lit. below-REF)]
「その 泥棒は すぐに 本当のことを 白状した。」
（Kullmann and Tserenpil (1996: 231) に基づく[11]）

önöödör「今日」、margaaš「明日」、öčigdör「昨日」、uržigdar「一昨日」、nögöödör「明後日」のような語は基本的にダイクティックな意味を示す語であるが、これらに再帰接辞がつくのは基本的に、「その日のことを（思い出した）」などの例文においてであり、この場合これらの語は副詞でなく、名詞扱いされているということになる。その他に、名詞扱いされていてさらに与格がついている場合には再帰接辞のついた例が見出される。

(47) Dorž odoo javavč
「ドルジは 今頃（になって） 出かけても
{önöödör / önöödör-t-**öö** / önöödörijn dotor gertee xürexgüj. [today-DAT-REF]
今日中には 家に 着かない。」
（Kullmann and Tserenpil (1996: 162) に基づく）

この文では önöödört-**öö** もしくは önöödör-ijn dotor [today-GEN inside]を用いれば、「今日中に」というニュアンスをはっきり表すことができるという。

《1-3》場所の副詞

方向を示す副詞のうちダイクティックなもの（tijš(ee)「そこへ（話し手からも聞き手からも遠い方へ）」、naaš(aa)「こちら側へ／私（話し手）の方へ」（下記の内モンゴルの例(48)では nacaši）、caaš(aa)「向こうへ／私（話し手）から遠ざかる方へ」、gadagš(aa)「外へ」、aragš(aa)「後ろへ」など、Kullmann and Tserenpil (1996: 223) 参照）は、ijš tijš「あちこち」のように並列した場合以外、一般に再帰接辞をとった形で現れることの方が多いという。再帰接辞を取った場合に主語にとっての方向でなく、話し手にとっての方向を指すことが多い。次の文(48)は命令文なので 2 人称が主語であるが、この再帰接辞はその 2 人称主語には支配されておらず、話し手を基準としている。

(48) Nacaši-**ban** ir_e. [to.here-REF]
「こっちへ 来て。」（清格尓泰 (1991: 209)）

この再帰接辞は任意であり、しかも次のような例[12]においては、再帰接辞を n’ に置き換えることもで

[11] この文は会話文でなく、語りの文ではないかという査読者の指摘があったが、前後の文脈がないためその判断はできない。コンサルタントによれば 1 人称主語の他の一般的行為でも同じように dor-oo と dor n’ の両形が成立するということであるため、語りの文であるか否かは特に両形の成立には関与していない。
[12] *Naaš n’ ir! とは言えないという。この理由は不明である。したがって、3 人称小辞の使用が可能になるのは、avaad

きるという。コンサルタントによれば、意味は変わらないという（すわなち上記と同様の「中和」が起きている）。例はハルハ・モンゴル語の形式のものを示す。

(49) { Naaš **n'** / Naaš-**aa** }　avaad　ir! [{to.here 3SG / to.here-REF}]
　「こっちの方へ　持って　来て！」（作例）

(49)にみるように再帰接辞の代わりに、n' が続いて単に方向等を示す例がある。しかしその場合には何か 3 人称のモノや人を基準とした方向を示すことはできない。次の (50)a. のように 3 人称が主語の文でも、この「西の方」は主語 ter xün にとっての西ではなく、話し手や聞き手にとっての西だという。

(50)a.　Ter xün　baruunš-**aa**　javsan. [to_west-REF]
　「その　人は　西の方へ　行った。」（Kullmann and Tserenpil (1996: 218)）

一方次の (50)b. の例文における「西の方」は、ter xün「その人」の家の西の方であり、話し手もしくは聞き手にとっての「西の方」ではない。最初の再帰接辞（gerijnx-ee の -ee）は主語をトリガーとし、2 番目の再帰接辞（baruunš-aa の-aa）は ger「家」をトリガーとしている。なおこの 2 番目の再帰接辞は任意であり、なくても意味は変わらないという。ただし内モンゴルの話者はこの文は言えないという。

(50)b.　Ter xün　〈ger-ijn-x-**ee** baruunš-**aa**〉　javsan. [〈house-GEN-NMLZ-REF to_west-REF〉]
　「その　人は　自分の家の　西の方へ　行った。」（作例）

一定の範囲の場所を示す副詞（üügeer(-**ee**)「この辺に」、tüügeer(-**ee**)「その辺に」（この 2 語はやや文語的であるという）、naaguur(-**aa**)「こちら側を」、gaduur(-**aa**)「外側」、xojguur(-**aa**)「後ろ側（北側）」など、Kullmann and Tserenpil (1996: 225) 参照）は、再帰接辞をとらないことも多いが、再帰接辞をとった場合には、主語にとっての場所を示すという。したがって上記の一連の方向を指す語とは異なった振る舞いを見せることがわかる。

(51)a.　Naaguur-**aa**　tojrood　ir! [around_there-REF]
　「（聞き手（主語）にとっての）　手前の側を　周って　来て」（作例）

(51)b.　Naaguur **n'**　tojrood　ir! [around_there 3SG]
　「（話者にとっての）　こちら側を　周って　来て」（作例）

コンサルタントによれば、まず話し手と聞き手の間に例えば大きな水たまりなどがあって、聞き手の進行方向の横にその水たまりがある場合に、(51)a. では聞き手は方向を変えずにその水たまりの聞き手側の縁に沿って移動し続け（例えば時計回りに進んでいたのならそのまま）、聞き手側の水たまりの周りに沿って話者の方へ来るよう指示しているのに対し、(51)b. では聞き手は方向を反転し（例えば反時計回りに）、話し手のいる側に水たまりの縁に移動してから、話し手のいる側に沿って水たまりの周りを周って話者の方へ来るよう指示しているのだという。

《1-4》数量の副詞

・主語の全体量を示す数量の副詞

主語自体の全体量を示す場合、再帰接辞はその副詞に必須のものとして要求される。再帰接辞のない bügdeer や gancaar は許容されない（はずすと文語的な表現となる）。3 人称主語の例も可能である。

「持って」という語が加わったためということになる。

(52) Bid bügd-eer-**ee** kino üzne. [everybody-INS-REF[13]]
「私たちは 全員で 映画を 見ます。」（Kullmann and Tserenpil (1996: 263)）

(53) Ted bügd-eer-**ee** kino üzne gesen. [everybody-INS-REF]
「彼らは 全員で 映画を 見る と言っていた。」（作例）

(54) Bi gertee ganc-aar-**aa** bajna. [alone-INS-REF]
「私は 自分の家に 一人で います。」（Kullmann and Tserenpil (1996: 263)）

しかも少なくとも bügdeer-**ee**「全員で」に現れる再帰接辞は主語に支配されているというよりは、「定」を示すものである、ということを示す証拠がある。再帰接辞と 3 人称の中和は、bügdeer-**ee**「全員で」は 1, 2 人称を含んでいるか否かによって再帰接辞の出現／非出現が変わるという。1, 2 人称を含んでいないと再帰接辞は使えないという。

すなわち、次の文で再帰接辞（-iyen）を 3 人称に代えることはできないという。この「～すればいい」における bügdeer（次の内モンゴルの例では bügüdeger）は話し手を含むことを含意するため、再帰接辞を伴った形でしか現れない。つまりこれは 1, 2 人称を含む「定」の場合である。

(55) bügüdeger-**iyen** yarilčabal sain. [everybody-REF]
「みんなで 話し合えば いい。」（清格尔泰 (1991: 244)）

他方、次の文では逆に bügüdeger-tü[14]に 3 人称の n’（内モンゴルの ni）を後続させることもできる[15]が、再帰接辞を用いることはできない。なぜなら話し手と聞き手は教えてあげる情報をすでに知っているわけで、bügüdeger「みんな」の中には含まれていないためであるという。すなわちこれは 1, 2 人称を含まない場合である。

(56) bügüdeger-tü **ni** keleǰü ög. [everybody-DAT 3SG]
「みんなに 教えて あげて。」（清格尔泰 (1991: 244)）

・主語の部分量を示す数量の副詞

部分量になり得る場合、再帰接辞は任意となる。

(57) Ede kedügüle(-**ben**) qamtu irebeü. [by.somebody(-REF)]
「この人たちは 何人かで 一緒に 来たのか。」（清格尔泰 (1991: 233)）

コンサルタントの内省によれば、この再帰接辞は、この人々が一つのグループをなしていることを示しているという。それゆえ、この再帰接辞がないと烏合の衆のように、その人たちの間の関係性がはっきりしない感じがするという。

---

[13] このように分析したが、この(52)～(54) の例にある bügdeer と gancaar に関して、小沢 (1983: 74, 92) は bügdeer〔副〕「皆で、総て」と gancaaraa〔副〕「唯一つで、単独で、孤独に、一人ぼっちで、差し向かいで、相対で」を独立した見出し語としてあげている。コンサルタントもあまりこのように分析できる語として感じていないようだ。したがってこれらの語も名詞と副詞の中間的な性質を示し、格と再帰接辞の現れからその品詞的な性質と位置づけを考えていくべき語であると思われる。

[14] これは内モンゴルでの形式を縦文字から翻字したものであるが、ハルハ・モンゴル語では bügd-e-d n’ [everybody-E-DAT 3]という形式になるという。

[15] ハルハ・モンゴル語では基本的に n’ は省略できないという。

先行研究の清格尓泰 (1991: 190) にあったように、［与格＋再帰接辞］は「範囲」を示すが、これを主語の部分量を示すものと考える。この場合再帰接辞は必須である。

(58) Ene oyutan sportdoo { sajn-d-**aa** / *sajn-d } orno. [{good-DAT-REF / *good-DAT}]
「この 学生は スポーツで 良い方に 入る。」（作例）

この部分量には話し手による判断が入っていて、話し手にとっての「よい方」などを示す。こうした例において、形容詞は名詞扱いを受けて与格をとり、その上で再帰をとるが、そこで与格はまるで再帰をとるベースとして働いているかのようにみえる。

・主語以外の名詞項の全体量を示す数量の副詞

主語の行為が支配している間接目的語について、その目的語が明示された上で、さらにその数量が副詞的に同格で示されている場合には、その数量に再帰接辞をつけることはできない。

(59) Eceg n’ tavan xüüxeddee tavuulan-d **n’** šine gutal avčee. [by_five_persons-DAT 3SG]
「父親は 5 人の 子供 5 人にそれぞれ 新しい 靴を 買ってあげた。」
（Kullmann and Tserenpil (1996: 246)）

この文における 3 人称の人称小辞 n’ は tavan xüüxed「5 人の子供」を受けていると考えられる。主語が支配しているのはあくまでも再帰接辞のついた tavan xüüxeddee「五人の（自分の）子供」の方である。これは「4.4.1. 主語の行為の目的語で主語の所有物であるが別のものに所有されている場合」で後述する統語的環境で再帰接辞が現れないことと基本的に同じ原則に従っているものと考える。

・主語の行為の回数を示す数量の副詞

これに対し、主語の行為の回数を示す副詞では再帰接辞は必須ではない。3 人称主語でも言える。訪問が 2 回目以降なら、再帰接辞があった方が自然であるという。この再帰接辞の使用は、話者が前回の訪問を念頭においているということを感じさせるという。

(60)a. Bi tanajd guravdax’[16] udaa(-g-**aa**) irž bajna. [time(-e-REF)]
「私は お宅に 三 回目で 訪問して いる。」
（Kullmann and Tserenpil (1996: 243) に基づく）

(60)b. Ter manajd guravdax’ udaa(-g-**aa**) irž bajna. [time(-e-REF)]
「彼は うちに 三 回目で 訪問して いる。」（作例）

・主語の行為の時間的な長さを示す副詞

主語がその時間を完全に支配している場合には、再帰接辞をとることがある。

(61) Iltgelee beldex geed doloo xonog ažlaasaa čölöö avsan čin’,
「発表を 準備しよう と 一週間 仕事から 休みを とったが、

neg ödr-**öö** zuragt üzeed demij öngröočixlee. [day-REF]
（その一週間のうちの）まる一 日を テレビを 見て、 ムダに 過ごしてしまった。」（作例）

[16] なお udaag-aa を削除し、guravdax’ に guravdaxi-a と再帰接辞をつけることも可能である。意味は変わらないという。

「その一日」は、私がわざわざ休みを取って得た「私の一日」のうちの一部であるため、再帰接辞がつくのだという。再帰接辞がなくても言えるが、ニュアンスは変わる。再帰接辞があると、ムダにしてしまったことに対する罪悪感があるが、再帰接辞がないと単にそのように過ごしたということになり、罪悪感のニュアンスは弱まるという。これは再帰接辞のない場合には neg ödr-**öö**「まる一日」が単に副詞として機能しているのに対し、再帰接辞が付いた場合には demij öngröööčix-「ムダに過ごしてしまう」の目的語として機能しているためであるとも考えられる。このような話者による時間の「完全な支配」については、現時点ではなおこの個別の例を得たにすぎないので、今後はさらに類似の例を収集してその成立条件を深く考察していく必要があるだろう。

《2》陳述副詞

Kullmann and Tserenpil (1996: 230) にある golduu「主に」以下 bürmösön「まったく、完全に」までの一連の陳述副詞を再帰接辞の接続の可否によって分類すると以下のようになった

再帰接辞のつかないもの : golduu「主に」、zoriud「わざと」、ünexeer「ほんとうに」、ixed「大いに」、sajtar「よく、完全に」、bürmösön「まったく、完全に」、tas tüs (tüs tas)「素直に／ドサッ（と）」、xaaš jaaš「ちゃんとしていない／大雑把な／てきとうな」、araj čaraj「ようやく、やっと」、sand mend「あわてて」、xalt(i) mölt「ちょっとの間で／ざっと」、döngön dangan「やっと、ようやく」、jav tav/cav「かっちり、ぴったり」

tas tüs (tüs tas)「素直に／ドサッ（と）」以下オノマトペ的な 2 語で構成されているものは全部再帰接辞がつかないと言うことがわかる。

再帰接辞のつくもの : dalduur「秘密の」（dalduur-**aa**）、ixenxd-**ee**「ほとんど」、gün-**ee**「本当に／深く」（güneeg-**ee**）、ünend-**ee**「実は」、ajand-**aa**「自然に」、bürn-**ee**「それぞれの」

このうち、dalduur「秘密の」（dalduuraa）を除いた 5 語はすでにもともとが再帰接辞のついたような形となっている。しかも再帰接辞がついているという意識は薄いようだ。例えば ajand-**aa**「自然に」についてみると、次のように 3 人称のついた例(62)も挙げられるが、ajandaa「自然に」で一語の副詞として捉えられているという。

(62) Ajand **n'** orxičix! [as_(s)he_is 3SG]
「(子供が泣いている時などに) そのままに しておけ。」（作例）

(63) Ene ažil ajandaa bütne.
「この ことは 自然に 済む。」（作例）

4.3.4. 後置詞

山越 (2012: 179-184) では、位置や方角をあらわす語以外の「後置詞的副詞」を 31 語、その例文と共に紹介している。その「後置詞的副詞」のそれぞれの例文に関して、コンサルタントに再帰接辞の接続の可否を判断していただき、それによってその 31 語の「後置詞的副詞」を分類すると以下のような結果が得られた。

再帰接辞のつかないもの : **garuj**「～あまり」、**šaxam**「～近く」、**orčim**「～くらい」、**bür/bolgon**[17]「～

[17] 内モンゴルの話者は、bür/bolgon「～ごと」、tutam「～ごと、～のたびに」、boltol「～まで（になるまで）」、xürtel

ごと」、**bür**「すべての」、**tutam**「～ごと、～のたびに」、**met**「～のような・～のように」、**boltol**「～まで（になるまで）」、**xürtel**「～まで（～にいたるまで）」、**gexed**「～までに」、derged「～のわきに」、gadaa「～の外で」、daraa「～のあとで」、turš「～の間じゅう」、tölöö「～のために・～のための・～の代わりに」、xuv'd「～にとって・～にかんして」、činee「～と同じぐらい」、busad「～以外（の人）」、öör「～以外（のもの）」、gadna「～のほか」、ilüü「～よりよけいに」、xamt「～と共に」、zereg「～と同時に」、adil「～と同じように」

再帰接辞のつくもの：**šig**[18]「～のような・～のように」、xažuud「～のわき」、xoorond「～の間に」、daguu「～に沿って」、uruu「～を伝って下へ」、ööd「～を伝って上へ」、tuxaj「～について」

このうち下線をひいたものは、属格名詞が先行し、場所を示す語である。再帰接辞がつく後置詞には、このような属格名詞が先行し、場所を示すものが多いことがわかる。ただしそのような後置詞が全て再帰接辞をとるわけではなく、derged「～のわきに」、gadaa「～の外で」のような例外もある（gadaa でなく gadna「～の外で」には再帰接辞がつき、下記の a, b, c[19]のパターンが可能であるという）。

詳しく実際の現れを見て行くと、その出現位置にはさらにゆれが観察される。

(64)a. ger-ijn gadn-**aa** mod tarisan. [house-GEN outside-REF]
(64)b. ger-ijn-x-**ee** gadna mod tarisan. [house-GEN-NMLZ-REF outside]
(64)c. ger-ijn-x-**ee** gadn-**aa** mod tarisan. [house-GEN-NMLZ-REF outside-REF]
「自分の家の 外に 木を 植えた。」（作例）

derged では先行する属格名詞の方に再帰接辞がつくという。xažuud「～のわき」は下記の a, b, c のパターンが一応可能と判断されたが、どちらか片方につく場合には先行する属格名詞についた方がよい感じがするという。

(65)a. ger-ijn-x-**ee** xažuu-d-**aa** daxiad ger barisan. [house-GEN-NMLZ-REF side-DAT-REF]
(65)b. ger-ijn-x-**ee** xažuu-d daxiad ger barisan. [house-GEN-NMLZ-REF side-DAT]
(65)c. *~??ger-ijn xažuu-d-**aa** daxiad ger barisan. [*~?? house-GEN side-DAT-REF]
「自分の家の 隣に さらに 家を 建てた。」（作例）

4.3.5. 名詞 —所有傾斜からみた再帰接辞の出現条件—

名詞への再帰接辞の付加に関しては、ターゲットの名詞が所有傾斜（角田 (2009: 127)）の上位（下記の表 2 では表の上の方）に位置すれば再帰接辞の必須性が高まり、下位（同じく表の下の方）へ行き恒常性・一体性が薄れれば再帰接辞はつきにくくなる、と予想した。調査例文は基本的にターゲットの名詞が主語に所属し、文末の述語の直接の項となっているものを対象とした。したがって階層の上位の名詞であれば必然的に主語に所属するものと認識され、再帰接辞をとることが当然予想される。実際の調査結果はおおよそ下記のようになった。

「～まで（～にいたるまで）」、busad「～以外（の人）」にも再帰がつくと判断した。
[18] なお岡田・向井 (2006) をはじめ、šig を「様態格」とし、後置詞でなく格接辞とみる立場もある。
[19] ただし c のパターンは少し不自然な感じもするようで、ネットで調べてみたところでは gerijnx-ee gadaan-aa という形式での 1 例が見出されたという。

表 2：所有傾斜の各層からみたモンゴル語の再帰接辞の必須性

	再帰接辞
身体部位	必須・省略不可
属性	必須・省略不可
衣類	基本的に必須、ないのは初めて服を着るか、ふだん着ない服を着た場合のみ
ｱｸｾｻﾘｰ	基本的に必須、ただし、誰のものだかわからない感じにはなるが、はずすことも可
親族	基本的に必須、ないと話し手が主語の場合、話し手の親族と解釈される
家	基本的に必須、ないと話し手の家と解釈される
家畜	基本的に必須、ただし、誰の家畜だかわからない感じになるが、はずすことも可
作品	任意、なくとも基本的に主語の作品と解釈される
その他	任意、文脈や物にもよるが、場合によってはつけるとおかしい場合もある

・属性

主語のいわば「側面語」（形、色、大きさなどの属性、高橋 (1975) 参照）が道具格で現れる場合、その名詞句は再帰接辞をとる。「側面語」は主語に所属するものと考えられる。

(66) Ter mod öndr-öör-**öö** 3 metr. [height-INS-REF]
「その 木は 高さが 3 メートルだ。（lit. その木は自分の高さで 3 メートルだ）。」
（Kullmann and Tserenpil (1996: 111)）

この文の文意は、Ter modny öndör (**n'**) 3 metr.という文でも同じように表現できるという。この 2 つの文の関係は日本語における「象の鼻が長い」と「象は鼻が長い」の関係に似ている。

ただし側面語でも、［道具格＋再帰接辞］の表現にできないものもある。žin「体重」が外来語（＜漢語）であることがその理由であるのかもしれない。

(67) Ternij žin **n'** 60kg. / *Ter žing-eer-**ee** 60kg. [weight 3SG / *weight-INS-REF]
「彼の 体重は 60kg だ。」（作例）

・衣類

次の文で qubčasu-**ban** の再帰接辞の -ban がなくても、「他人の服」とは解釈できない／されない。再帰無しではふつう発話しないが、無理に解釈すると、（ふだん服というものを着ない原始人などが）裸でなにも着ていない状況から着るような感じがする[20]という。düremt xuvcas「制服」など、ふだん着ない特別な服なら再帰接辞無しでも言えるという。

(68) Qubčasu-**ban** emüsüged ger-eče-ben ɑarčai. [clothes-REF]
「服を 着て 家を 出た。」（作例）

・親族名称

次のように再帰接辞がないと、1 人称が主語の場合にのみ、自分の兄として解釈できる。

[20] 査読の方からは、「（寝ぼけて）服を（着たまま）お風呂に入ってしまった」という文について調査してはどうかと言う提案をいただいた。せっかくの査読のコメントでもあり、コンサルタントには伺ってみたが、シャワー等に比べ「お風呂」も一般的でない上、寝ぼけた状態でお風呂に入る状況がどのようなものなのか想定しずらいなど、再帰接辞以前の部分で文の成立における難点が多すぎ、調査結果は得られなかった。

(69) aq_a-tai qamtu
「兄と　ともに」（清格尔泰 (1991: 218)）

なお親族名称ではないが、次の例でもし ger-t-**ee** の再帰接辞がないと、従属節中の主語である「あなた」の家ではなく、やはり話し手の家である、と感じられるという。

(70) Čamajg ger-t-**ee** untaž bajx üed gadaa boroo orž bajsan. [house-DAT-REF]
「あなたが 家で 寝て いる 時、 外は 雨が 降って いた。」
（Kullmann and Tserenpil (1996: 111)）

・作品

「作品」には論文、著書などが属す（角田 (2009: 128)）。少なくともこの文では再帰接辞がなくとも問題なく、かつ再帰接辞なしで主語の執筆した論文であると解釈されるという。

(71) Ter diplom-**oo** bičiž duusgasan. [thesis-REF]
「彼は 自分の論文を 書き 終わった。」（作例）

所有傾斜に関する調査と分析は以上である。所有傾斜で上位に位置する名詞が指示するものは、当然のことながら主語にとって恒常的に関わっている定性の高い対象でもある。したがって所有傾斜の観点から名詞自体の意味的な特徴を手掛かりに分析を行ったものの。実際の発話での具体的な対象における再帰接辞の出現／非出現にはやはり情報構造が深く関わっており、所有傾斜と情報構造の両者が密接な関係にあることがわかった。

4. 4. 再帰接辞のつく要素が示す統語的条件

4. 4. 1. 主語の行為の目的語で主語の所有物であるが別のものに所有されている場合

2.3. 節において、N_1-N_2 構造の修飾要素（N_1）の方に再帰接辞がつくことについての Kullmann and Tserenpil (1996: 108)の指摘を確認した。そこでは被修飾語（N_2）は主語に所属するものではなかった。では、被修飾語（N_2）も主語に所属するものであった場合には N_1-N_2 構造のどちらの名詞に（もしくは両方の名詞に）再帰接辞をつけるのだろうか。

調査の結果、その場合、原則的に全体を示す名詞（N_1）の方にのみ属格と-x を介して再帰接辞がつくことがわかった。これは、次の例(72)で言えば deel「デール（モンゴル服）」のほうが主語によって支配され、xancuj「袖」は「デール」に支配されているため、たとえ主語に所属する「袖」であっても、主語によって直接支配されているとはみなされないためであると考えられる。

(72) Ter barildaž bajgaad deel-ijn-x-**ee** xancujg jaz tatžee. [deel-GEN-NMLZ-REF]
「彼/彼女は 相撲して いたので、 デールの 袖を 引っ張って破いた。」
（Kullmann and Tserenpil (1996: 222)）

しかし、上記の原則にも例外が観察される。

(73) kögšin eǰi nilbusu-ban ǰölgügseger
「おばあさんは 自分の涙を 拭きながら、

öber-ün ger-ün ǰobalangtu teüke-**ben** yariǰu ögčei. [history-REF]
自分の 家の 悲惨な 歴史を 話して くれた。」（清格尔泰 (1991: 279)）

teüke-ben [history-REF]「歴史」の再帰は ger「家」を受けており、ger によって所有されているために

再帰接辞がついている感じがするという。ger-ün [house-GEN]にも再帰接辞をつけて、ger-ün ki-**ben** [house-GEN NMLZ-REF] とし、再帰接辞を伴った 2 つの名詞項が現れる文も許されるが ger-ün ki-**ben** となっても teüke-ben の再帰接辞が落ちることはないという。

このような例外においては、N_1-N_2 構造における 2 つの名詞の意味、さらには 2 つの名詞の間の意味関係も再帰接辞の出現に関係しているものと考えられる。次の例[21]a, b にみるように、「犬のえさ」と「犬の生涯」では再帰接辞の出現を許容するか否かに関して差が生じる。

(74)a. Emee noxojnijxoo {xool-ijg / *xool-**oo**} xijž ögsön. [{food-ACC / *food-REF}]
「おばあさんは 自分の犬の {えさを / *自分のえさを} 作って あげた。」（作例）

(74)b. Emee noxojnijxoo {tüüx-ijg / ??tüüx-**ee**} jar'ž ögsön.[{history-ACC / ??history-REF }]
「おばあさんは 自分の犬の {歴史 / ??自分の歴史を} 話して くれた。」（作例）

さらに、対象への愛情の度合いによって、再帰接辞の接合の可否が左右されることがある。これは先行研究（山越 (2012: 74)）で 2 人称代名詞に再帰がつく際の条件としてあげられていたものである。フフバートル (1993: 114) も「動作主自身にとって親しみのある物事を言い表す場合にも用いられる」と指摘している。

(74)c. Emee xajrtaj noxojnijxoo {tüüx-ijg / tüüx-**ee**} jar'ž ögsön.
[{history-ACC / history-REF }]
「おばあさんが 自分の愛する 自分の犬の {歴史 / 自分の歴史を} 話して くれた。」（作例）

4. 4. 2. 引用節の中の名詞が引用節の外の主語に所属する場合

次の文(75)で ažl-**aa**「自分の仕事」はあくまでも引用節中の「あの人」の仕事であり、引用節の外の「私たち」の仕事とは解釈されない。したがって主語による再帰接辞の支配は引用節の内部には及ばないものと考えられる。なお水野 (1991) は外の関係の連体修飾節は扱っているものの、引用節自体については扱っていない。

(75) Manajxan tüünijg ene ažl-**aa** xijž čadna gež najdaž bajna. [job-REF]
「私たちは、 あの人は この 仕事が できる と 期待して いる。」
（Kullmann and Tserenpil (1996: 201)）

次の例(76)は一見引用節中の名詞が主節の主語に支配しているようにも見えるが、a. の訳の場合、xüüxd-**ee** は引用節の外にあり、直接 bodson の目的語になっていると考えられる。他方、b. の訳になる場合、xüüxd-**ee** は引用節の中にあり、jalsan の目的語として解釈される。

(76) Ter xüüxd-**ee** jalsan gež bodson. [child-REF]
「a. 彼は（誰かに） 自分の子供が ［勝った］ と 思った。
／b. 彼は［（彼が） 自分の子供に 勝った］ と 思った」（作例）

このことは次の 2 文を比べるとはっきりする。b. の文のような語順にすると、xüüxedd-**ee** は引用節中の名詞となるので、引用節の主語である tüünijg「彼」の息子であるという解釈しか許されない。

---

[21] ただし (73)と(74)では主語と N_1、N_2 の関係も大きく異なっているため、単純には比べることはできないだろう。N_1-N_2 に関してはさまざまな組み合わせが考えられるであろうし、それぞれの名詞と主語との関係も多様なケースが考えられるので、今後さらに広く深く研究して行く必要があると考える。

(77)a. Bi xüüxed-d-**ee** ter talaar xelsen gež bodson cin',
「私は 自分（私）の子供に その ことを 言った と 思ったが、
xelexee martčixsan bajna. [child-DAT-REF]
言うのを 忘れていた ようだ。」（作例）

(77)b. Bi tüünijg xüüxedd-**ee** ter talaar xelsen gež bodson cin',
「私は 彼が 自分（彼）の子供に その ことを 言った と 思ったが、
ter xelexee martčixsan bajna. [child-DAT-REF]
彼は 言うのを 忘れていた ようだ。」（作例）

以上、筆者の引用節に関して調べた範囲内では、2.7. 節でみた水野 (1991) の調査とは異なり、コンサルタントは主節の主語が従属節中の名詞のトリガーとなる解釈を認めなかった。種々の複文における再帰の支配という点に関しては今後さらに詳しく条件を設定して調査して行く必要があると考える。

4.4.3. 従属節中の斜格主語が再帰接辞のトリガーとなるか否か

次の文(78)は言えるという。したがって対格の斜格主語でも再帰接辞のついた gancaar-aa を支配していることがわかる。もしはずすと擬古文のように感じられるという。ただこの文は、他の機会に 2 人でもしくは家族で何度か来たことがあり、その時と対比して「一人で」来た時のことを特に問題にしている感じがするという。したがってここでの再帰接辞の使用が強い対比のニュアンスを伴うことがわかる。

(78) tüünijg ganc-aar-**aa** irxed bid untaž bajsan. [alone-INS-REF]
「彼が 一人で 来た時には、 私たちは 寝て いた。」（作例）

なお 2.7. 節でみた例文(15)（水野 (1991: 205)による）においてすでに対格の斜格主語がトリガーとなることは示されていたが、本節ではこのことをさらに他の例文でも確認した。

4.4.4. 従属節中の名詞を主節の主語が支配する場合

次の文(79)はきわめて例外的な例と考えられるが、主節の主語がトリガーとなり、従属節中の<u>主語</u>をターゲットにして再帰接辞を生じさせている。

(79)a. Bi ažl-**aa** duusax xürtel end bajna. [job-REF]
「私は 自分の仕事が 終わる まで ここに いる。」（Kullmann and Tserenpil (1996: 314)）

話者によれば、文法的には ažil duusax「仕事が終わるまで」（duusax は自動詞）か ažl-**aa** duusgax「自分の仕事を終えるまで」（duusgax は他動詞）のどちらかで言った方がよいように感じられるという。ただし上の文も自然に言えるように思われるという。実際にこれは先行研究にあった例文である。次のように duus-「終わる」自体を副動詞にした表現も問題なく言えるという。この場合でも ažl-**aa** duusgatal「仕事を終えるまで」（duusgax は他動詞）と言ってもよいという。

(79)b. Bi ažl-**aa** duustal end bajna.
「私は 自分の仕事が 終わるまで ここに いる。」（作例）

先行研究の例文（Kullmann and Tserenpil (1996: 373)）を用いて、従属節中の主語に再帰接辞をつけることが可能かどうかをコンサルタントに尋ねたところ、さらに次のような文が可能であると判断された。

(80) Tolgoj-g-**oo** övdöxöd ta jaadag ve? [head-E-REF]
「頭が 痛くなった時、 あなたは どうしていますか。」
（Kullmann and Tserenpil (1996: 373)を基に作成）

このように（従属節の）述語によっては、従属節中の主語に再帰接辞をつけることが可能であることがわかる。どのような範囲のどのような述語であれば従属節中の主語に再帰接辞をつけることが可能であるのか、今後研究を進めて明らかにしていく必要がある。

4.4.5. 主語に再帰接辞のついている例

ただし、上記の duus-「終わる」（次の内モンゴルの例では daGasu-）という動詞は問題が多く、次のように明らかに主節の主語に再帰のついた例(81)も見いだされる（daɢusu-はハルハ・モンゴル語の duus-に対応する形式である）。

(81) bi ağil-iyan daɢusuɢ_a ügei. [job-REF]
「私は 仕事が（まだ） 終わってい ない。」（清格尔泰 (1991: 288)）

duus-「終わる」（内モンゴルの例では daGasu-）は自動詞なので、この文は二重主語文のようになっており、いわばその小主語に再帰がついた形になっている。duusgaagüj（内モンゴルでは daɢusqaɢ_a ügei）と他動詞にすることもできる。その場合の訳は「仕事をまだ終えていない」という意味になるという。

5. 結論と今後の課題

5.1. 結論

本稿では、以下の一連の結論を具体例とその分析によって示した。

[1] 情報構造の観点からの帰結

(1) 一般論の対象や、慣用句内の不定の対象には再帰接辞をつけられない。逆にアクチュアルな場面での個別の対象には再帰接辞がつき得る。

(2) 所属関係がなくとも、恒常的な使用などがあれば、その対象は主語とつながりのあるもの（より定性の高いもの）であると認識され、再帰接辞がつく。

(3) 特に 1, 2 人称主語の場合、話し手と聞き手にとって「定」の対象、もしくは話し手にとっての「特定」の対象であれば、主語が管理もしくは処理できないものにも再帰接辞がつく。

[2] 語彙的な観点からの帰結

(4) 達成目的語をとるような動詞では、定の対象にのみ再帰接辞がつく。

(5) 指示詞、疑問詞、副詞、後置詞、など（の少なくとも一部）には再帰接辞がつく。特にダイクティックな要素に再帰接辞がつく際には、話し手をトリガーとした対象を示す。

(6) 指示詞の対象に対して何らかの行為が行われる場合には指示詞にも再帰接辞がつく。その場合主語ではなく話し手にとっての特定の対象を指示する。

(7) 疑問詞に再帰がついた場合、その疑問文は情報要求の疑問文ではなくなり、修辞疑問文となり、非難や感心、驚きなどの感情的なニュアンスが感じられるという。

(8) 時間や場所の副詞のうち、ダイクティックなものの一部は発話時点や発話の場所を示す場合に再帰接辞をとり得る。その際、3 人称の人称小辞と対立の中和を示すものがある。

(9) 主語の全体量を示す副詞では再帰接辞が必須となる。

(10) 陳述副詞の一部には再帰接辞をとるものがあるが、語彙化している。
(11) 所有傾斜の観点から分析を行った結果、完全に所有者からの分離が不可能な身体部位と属性については再帰接辞が必須であった。衣類、アクセサリー、親族、家、家畜においては、再帰接辞は基本的に必須であるが、状況によってはつけない表現も可能であることがわかった。

[3] 統語的な観点からの帰結
(12) 主語の行為の目的語で主語の所有物であるが別のものに所有されている場合、原則的には修飾語の方にのみ再帰接辞がつくが、名詞間の関係や主語から対象への愛情の度合いなどによっては被修飾名詞の方にも再帰接辞がつくことがある。その場合には修飾側の名詞と被修飾名詞の両方に再帰接辞がつきうる。
(13) 主節の主語がトリガーとなって引用節の中の名詞に再帰をひき起こすことはない。
(14) 従属節中の主語が対格の斜格主語であっても、再帰のトリガーとなる。
(15) 主節の主語がトリガーとなって従属節中の主語に再帰をひき起こすことがある。二重主語文では、単文の（小）主語が再帰接辞をとることもある。

3 つの観点からの分析結果がさらにどのような相互関係にあるのかを示すことは容易ではないが、ひとまず次のような整理を行っておく。まず[3]の統語的規則が適用される。統語的規則はやはり主節の主語がトリガーで主節の名詞項をターゲットする場合を原則とするが、統語的にこれに準ずる要素もトリガーとターゲットになることがわかった。次に統語的規則で説明されないものは、おおまかに言えばダイクティックな性格をもつ「品詞」（中立的な用語を意図して「語群」と呼んでもよいと考える）につくケースであり、この場合トリガーは話し手となる。したがって語用論的な条件に規定され、統語論的な規則の適用範囲を超えることになる。談話の中での発話意図が問題となるので、再帰接辞の出現条件はその文の情報構造に依存したものになると考えられる。

5.2. 今後の課題

今回は情報構造と語彙、統語の 3 つの観点から調査・分析を行ったが、どの観点からもさらにさまざまなケースが想定できる。したがって網羅的な調査を行ったとは言えない。今後は、より網羅的に調査し、広く適応できる一般規則を明らかにしていくとともに、他の個別のケースに適応される諸規則との関係や規則相互間の関係、さらには規則全体の階層と体系、規則の適用順序などを明らかにしていく必要があると考えられる。ただそのためにはどこにどのような問題がどの程度示すことが研究の第一歩として非常に重要であり、本稿はその全体像を示す役割を果たしたものと考えている。筆者はもともとモンゴル諸語を中心に研究してきた研究者ではなく、不十分な考察もあろうが、本稿を叩き台として特にモンゴル諸語を専門とする研究者の議論が深まり、再帰接辞に関する研究が進展することを祈りたい。

次に、本稿における最大の問題点はコーパス調査を行っていないことである。今回、部分的にでもコーパス調査を行うことを考えたが、コンサルタントからの聞き出しの結果と食い違いが生じた場合、さらに膨大な紙数を取り、論文自体や結論が煩雑になることを危惧してあきらめることにした。次回はコーパスの使用が可能な具体的形式について全般的な調査を行い、今回の聞き出しによる結果と突き合わせ総合することによって、より精緻で明確な結論を得たいと考えている。

［謝辞］
本稿の草稿については、2019 年 11 月 9 日に行われた北方言語学会第 2 回研究会で発表し、その際に

参加されていた先生方から有益な情報を賜った。全員のお名前をあげることはできないが、ここに記して感謝申し上げたい。山田洋平氏には特に草稿を読んでもらってコメントをしてもらった。深く感謝申し上げる。貴重なコメントを下さった 2 名の匿名の査読者の先生方にもお礼申し上げたい。コメントを十分に反映できていないとすればそれは筆者の責任である。

何より時間を割いて例文の適格性を判断し、作例もしてくださるとともにいろいろと貴重なコメントをくださったコンサルタントの方々に深くお礼申し上げたい。

参考文献

フィルモア，チャールズ J. 1975. 田中春美・船城道雄訳『格文法の原理 ―言語の意味と構造―』東京：三省堂

フフバートル. 1993. 小沢重男（監修）『モンゴル語基礎文法』東京：たおフォーラム

Janhunen, J. 2012. *Mongolian*. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.

風間伸次郎. 2019. 「アルタイ諸言語の場所表現における名詞的性格について」『北方言語研究』9: 41-65.

Kullmann, R. and D. Tserenpil 1996 [2006（第 4 版）]. *Mongolian Grammar*. Hong Kong. Jenso. Ltd.（第 4 版は Ulaanbaatar: Admon Co., Ltd. ）

Luvsanvandan, Š. 1968. *Orčin cagijn mongol xelnij bütec*. Ulaanbaatar: BNMAU Šinžlex uxaany akademi.

水野正規. 1991. 「モンゴル語の再帰語尾の用法について」『東京大学言語学論集』11: 203-210.

岡田和行・向井晋一. 2006 [2016 改訂]. 「東外大言語モジュール：モンゴル語文法モジュール（標準コース Lesson 04, Step 1. 再帰語尾と再帰代名詞 [解説]）

http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/mn/gmod/courses/c02/lesson04/step1/explanation/030.html（2019 年 9 月 18 日最終閲覧）

小沢重男. 1983. 『現代モンゴル語辞典』東京：大学書林

Önörbajan, C. et al. 2008. *Orčin cagijn mongol xel*. (2nd editon). Ulaanbaatar: Mongol Ulsyn Bolovsrolyn Ix Surguul'.

清格尔泰. 1991. 『蒙古语语法』 呼和浩特：内蒙古人民出版社

塩谷茂樹・中嶋善輝. 2011. 『世界の言語シリーズ 3 モンゴル語』大阪：大阪大学出版会

高橋太郎. 1975. 「文中における所属関係の種々相」『国語学』103: 1-17.

角田太作. 2009 [初版 1991]. 『世界の言語と日本語 言語類型論から見た日本語』東京：くろしお出版

山越康裕. 2001. 「モンゴル語の名詞-動詞型複合動詞」『環北太平洋の言語』7: 193-207.

山越康裕. 2012. 『詳しくわかるモンゴル語文法』 東京：白水社

The Leipzig glossing rules https://www.eva.mpg.de/lingua/pdf/Glossing-Rules.pdf（2020 年 2 月 9 日最終閲覧）

執筆者連絡先：kazamas@tufs.ac.jp

原稿受理：2019 年 12 月 31 日